

じゃれつき遊びの効果と特徴に関する研究

A study of the Effects and Characteristics of Physical Play

Yohei CHIBA

千葉 洋 平

1. は じ め に

近年、保育現場において、対人的トラブルや落ち着きのなさ、ルール違反といった行動特徴を持つ、いわゆる「気になる子ども」の増加が指摘されるようになってきている¹⁾。「気になる子ども」の調査では、その割合が男児 21.04%、女児 5.58%、全体で 13.43%であったことが報告されており²⁾、この結果は、社会性や道徳性の形成が困難になりつつある現代の社会状況を示唆している。そのため、運動による社会性や道徳性の形成は、「気になる子ども」のみならず、現代の子どもの全般的な課題として注目されるべきであろう。

こうした中「じゃれつき遊び」と称される遊びが前頭葉の機能を高め、子どもの発達に寄与することが報告されている^{3) 4)}。鹿野らはじゃれつき遊びについて、ダイナミックに身体を動かしながら遊ぶ活動と定義している。さらに、長年じゃれつき遊びを実践している S 幼稚園の様子から、複数の子どもが大人の背中に飛び重なることや高いところから飛び降りるといった行動がじゃれつき遊びには見られることを説明している⁴⁾。また正木らは、じゃれつき遊びをスキンシップを主とした遊びとした上で、その中で運動量を確保しつつ

コミュニケーションを図っていく方法を推奨している⁵⁾。

従来までのじゃれつき遊びにおける報告のほとんどは、その前頭葉機能の発達に対する効果を検証したものである。そのためじゃれつき遊びを通じて表れる子どもの具体的変化やじゃれつき遊びのどのような側面が子どもの発達に寄与しているかといった点について実証的に検討がなされていない。そこで本研究はじゃれつき遊びを通じた子どもの変化やじゃれつき遊びの特徴に関する基礎的な資料の収集を研究の目的とする。

2. 方 法

2.1 研究協力者

A 市内にある B 保育園の園児及び保育士、そして K 大学の学生及び K 大学大学院の大学院生を本研究の協力者とした。その研究協力者は、園児が 5 歳児 24 名 (男児 : 14 名、女児 : 10 名)、4 歳児 21 名 (男児 : 7 名、女児 : 14 名)、3 歳児 24 名 (男児 : 13 名、女児 : 11 名) であり、保育士は女性の保育士 9 名であった。また大学生は 5 名 (男性 : 3 名、女性 2 名)、大学院生は男性 3 名であった。

2.2 じゃれつき遊びの内容

B保育園の園児は、B保育園のホールにおいて保育士や大学生、大学院生とともにじゃれつき遊びを実施した。実施期間は、2013年11月の平日であった。体育館の中には、エバーマットを敷きそこに子どもが走り込んでジャンプをするスペース、バスタオルを用意しそこに子どもを乗せて大人が引いたり、子ども同士で引きあって移動して遊ぶスペース、そしてスポンジマットを敷き、その上で大人の背中に飛び重なることや、大人が子どもを抱えてグルグル回す等の遊びが行われるスペースの3つが用意された。11月1日～22日は、9:30～11:00に学年毎に分かれ30分ずつじゃれつき遊びを実施した。その際、じゃれつき遊びを行う学年の順番は特に定められておらず、保育士の間でランダムに決定された。11月25日～29日では、保育園の運営上の理由から、じゃれつき遊びの時間帯を8:30～9:30に移行し、その時間を20分ずつの3回に分け、登園した順番で学年をまたいでじゃれつき遊びを実施した。

2.3 調査内容

じゃれつき遊びを実施した学年の担任である保育士に対し、学年毎（各学年とも2名の女性保育士）に非構造化法を用いて面接調査を実施し、じゃれつき遊び後の子どもの変化やじゃれつき遊びについて感じた印象及びその特徴等について尋ねた。その際、対象者の同意を得てICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。得られたデータから、保育士が感じたじゃれつき遊び後の子どもの変化やじゃれつき遊びの特徴に関わる内容等を12の形態に分類した。

2.4 倫理的配慮

本研究は、対象園に説明を行い合意を得た後、園の取り組みの一つとして実施された。また、保護者に対する調査の趣旨と内容等についての説明は、対象園の保育士によって行われた。

3. 結果及び考察

今回の調査で得られた12の形態は次の通りである。

3.1 子どもの変化

じゃれつき遊びの実施から保育士が感じた子どもの変化に関わる語りとして以下のようなものがある。

形態1：社会性

- ・（じゃれつき遊びをしてから）30分くらいはとても落ち着いてみんな（保育士の話を）聞こうとする姿勢がよく出来ていましたね。
- ・お散歩なんかに行くときに整列するのがすごく短時間でできるようになった。
- ・担任とすごく意思の疎通ができるようになってきたっていうのをすごく感じて、「ボク大丈夫？できてる？」とかあと「おはよう」って彼（子ども）から言ってきたりとか。
- ・その後（じゃれつき遊びの後）…（月曜日に）土曜日と日曜日のことをお話しするそういう活動もあったんですけど、…すごくテンポよくサッサと言えたりとか、ちゃんとしたはっきりした声で言えたりとか、そういうのが見られて、最初の頃すごい良く感じましたよ。
- ・だから自分が出せるようになってきたのかな。今度は（自分が出せる子どもに対して）コントロールもしなくてはいけなモードにも入っているんだろうけど、けっこう自分を出せるようになってきましたよね。

形態2：集中力

- ・（じゃれつき遊びの後に）どのくらい集中するかなっていう感じで。そしたら折り紙2枚を使ったサンタクロースなんですけど。みんな（説明の）呑み込みが早くて、静かにやってる姿がありましたね。
- ・園庭遊びはすごく落ち着いてましたね。なんか集中してお友達と砂場で遊んだりとか。

形態3：末端の発達

- ・末端がね、少し未発達なところがまだあるんですけども。それが少しね。つまむことがきゅっとちゃんとできるようになったから脱ぐのもちゃんと自分でスムーズにできるようになった。

形態4：事故の報告の減少

- ・事故簿みたいな、ちょっと怪我したちょっと転んだっていうのを付けているんですけど。なんか（記入する機会が）減りましたよね。

形態5：遊びの変化

じゃれつき遊び以外での保育士が感じた遊びの変化として以下のようなものがある。

- ・平均台のドンじゃんけん。あれも全然トラブルなく自分たちで友達を呼び合って遊んでいた。
- ・バスケットボールのゴールなんてずっとあるのに、誰も使ってなかったのに最近なんか本当に「入れてみよう」って気に勝手になって。教えてもないのにやり始めてたり。
- ・かくれんぼとかも最近自分たちでやり始めて。自分たちのルールなんですけど。…本当集団で遊べるようになってきていて。
- ・持続するんですよ、遊びが。それが私はちょっと感じたんですよ。…ホッピングをずっとやっている。毎日のように朝、夕と。ボールやる子は自分でボールやってきてひたすら友達とやりだしているとか。本当、違いますよね。あれね。みんなできるようになったし。そう、できることが大事なんじゃなくてやろうとする継続する力がついたなって思っ。
- ・相手との距離感とか、やられたら痛いってこともたぶんわかったと思うし。だから戦いごっこの様式も変わっているとか昨日も思っ。
- ・彼女は園庭なんかで遊んでいると遊び損ねて、ままごとなんかでもずっと私と手をつないで（時間が）過ぎちゃうようなことがあった子が、何かしたいって仕掛けてくるようになってるので、たぶんじゃれつき（遊び）のああいうので、イメージがあって、こうやって遊んだら楽しそうだなっていうのができてきたんじゃないかなっていうのが感じるんですけど。

3.2. じゃれつき遊びの特徴

保育士が感じたじゃれつき遊びの特徴に関する語りとして以下のようなものがある。

形態6：全身を使った体の動き

- ・体育指導なんかでも経験しているはずなんですけれども、それ以上に今までなかった身体の動きができるようになったということで、大きなマットにぶつかってライダーキックってやってみたりとか、自然に大きい子の真似して前転しながら飛び込んでくるとか。たぶん3歳だと今まで経験はなかったんでしょうが、思いっきりふんと、全身を飛び込んでくるっていうことも…。
- ・ただ自分たちで遊ばせても、砂場でじゃんじゃん遊ぶとか、砂場もいいんだけど。でもやっぱり体を全部使って、声出して、いっぱい笑って遊ぶのって大事なんだなって。

形態7：身体接触

- ・やっぱりそういった少しずつの、なんて言うんですかね体の触れ合いからどんどんどん（体を）使っていくのも、あれ（子どもが変わる要因）ですし。

形態8：面白さ

- ・あれ（じゃれつき遊び）は（友達とぶつかっても）楽しいから怒らないし、痛みが飛んでっちゃうみたいな感じですかね。痛みより、こうやって楽しさが勝つんですよ。（痛いことがあっても）よしやるぞみたいな。
- ・楽しいからきつと落ちてても別に相手を責めるわけでもなく、あの中でケンカってないですよ。踏まれてようがこんなになってつぶされようが、楽しいから怒らないんだなって思いますね。
- ・表情がね、終わった時の表情がすごいみんなイキキしてますよね。
- ・例えば何かの活動をした時にやっぱりあの興味を持つ持たないってあると思うんです。運動が嫌いだったり、制作が苦手とかなんかね、あると思うんですけど。そういう顔が一人も見られ

ないんです。

形態9：大人の存在

- ・大人にやってもらう。たぶん自分が子どもだったら絶対楽しいんだらうなっていう。おっきな人にコロんとやられたりとか。乗っかったりとかっていうのは非常に思いますよね。
- ・子ども同士だと危ない。加減がわからないから危ないのかなって部分もあるし。

形態10：主体性

- ・(子どもが)自分のできることをしますし、「これ(じゃれつき遊び)をやりたい」って気持ちがあるのかなって思います。
- ・体育指導とか私たちがこう提供するものって言うのは、これがあってこうしてこうするっていうやっぱり規制の中での(活動)っていうのと、やっぱり自由に体を使って遊べるその差はかなり大きいかかって思います。
- ・(じゃれつき遊びは)理屈がないから、まあ何にも頭使わなくて思いのままに動けるってところが。何の脈絡もなくできるっていうのが。いいのかなって。

3.3. じゃれつき遊びの効果の特徴

保育士が感じたじゃれつき遊びの特徴に関する語りとして以下のようなものがある。

形態11：継続性

- ・最初の頃、その直後に変化を感じましたね。すごく感じましたね。(じゃれつき遊びを)始めたころに。始めたころの終わった直後の効果がすごく、すごいなっていうのを感じた記憶があります。…じゃれつき(遊び)の後にいつもと同じ活動をしているんですけど、すごくテンポよくサッサと言えたりとか、ちゃんとしたはっきりした声で言えたりとか、そういうのが見られて、最初の頃すごい良く感じましたよ。
- ・(指示を聞く集中力は)1日中は続かないですね。やっぱりその直後。
- ・一つなんか頑張っちゃうと、一つ頑張ったことでもう充電は切れるって感じですね。

- ・そのなんていうか、(生活の)途中でガチャガチャしてるってあんまり思ったことは私はないんですよ。そのあとで。なんかこう(子どもの行動が)「え、戻っちゃった」っていうような記憶っていうのはないんですよ。

形態12：不明確さ

- ・(じゃれつき)遊びの効果については、(色々な要因があり単純に)比べられないのでよくわからない。
- ・お話がね、聞けなくなる時もありますけど、わあわあ、わあわあしている時もあるって、そういうときはありますが…。そればかりじゃなくってちゃんと聞ける場面もあったりとかはするけど、まあでも夕方の帰りの会になると、ちょっと結構ざわざわしてますよね。…少しずつ継続して(子どもがうまく生活することに)慣れて行ってるから、私たちもそれに慣れちゃってて。
- ・(これまでも)トラブルを起こす子は起こしている。

4. おわりに

本研究では、じゃれつき遊びを通じた子どもの変化やじゃれつき遊びの特徴に関する基礎的な資料の収集を研究の目的とした。

その結果、子どもの変化として、「社会性」「集中力」「末端の発達」「事故の報告の減少」「遊びの変化」という6つの形態が確認された。これはじゃれつき遊びから生じやすい子どもの変化である可能性を含んでいる。じゃれつき遊びの特徴としては、「全身を使った体の動き」「身体接触」「面白さ」「大人の存在」「主体性」の5つの形態が明らかとなった。これらは他の活動にあまり含まれないじゃれつき遊びの特徴として見ることができる。じゃれつき遊びが特に子どもの発達に寄与すると考えられているのは、こうした特徴を含んでいるためであると推察される。また、じゃれつき遊びの効果の特徴として、「継続性」「不明確さ」

の2つの形態が導かれた。これは効果の継続性が保育士によって異なって実感されていることや子どもの変化に対するじゃれつき遊びの貢献度の抽出には困難が付きまとうといった課題も含んでいる。今後は今回明らかになった結果をもとに、じゃれつき遊びの特徴がどのように子どもへ変化を与えていくのか、あるいはそこからじゃれつきの在り方やその指導法がどのようにあるべきなのかについてより詳細に検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 郷間英世・圓尾奈津美・宮地知美・池田友美・郷間安美子 (2008) 幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究. 京都教育大学紀要, 113: 81-89.
- 2) 郷間英世・郷間安美子・川越奈津子 (2007) 保育園に在籍している診断のついている障害児および診断はついていないが保育上困難を有する「気になる子ども」についての調査研究. 発達・療育研究, 23: 19-29.
- 3) 成田奈緒子・原田ゆかり・樋口大樹・田副真美・成田正明 (2011) じゃれつき遊びによる前頭葉抑制機能の変化. 文教大学教育学部紀要, 45: 81-89.
- 4) 鹿野晶子・野田寿美子・野井真吾 (2012) 朝の身体活動プログラムを実施しているS幼稚園児の hochu 神経活動の特徴:F幼稚園児との比較から. 幼少児健康教育研究, 18 (1): 28-36.
- 5) 正木健雄・井上高光・野尻ヒデ (2011) 3~6歳 キレない子ども 集中力のある子どもに育つ 脳をきたえる「じゃれつき遊び」. 株式会社 小学館: 東京.